

連載

サンダル履きまま旅 2

◇ イランでも選挙が… ◇

寺井融

Terui Toru

「核開発疑惑」で、いま世界各国から注目を集めているイランに、一度だけだが、訪問したことがある。

1996年陸路イランへ 厳格な入国審査

同国には、東トルコからギョルブラックの国境事務所を通って、陸路で入った。トルコ側で出国手続きを終えると、トルコでもない、イランでもない、中間地帯となる部屋に入る。そこを出ると、イラン国となる。トルコ側の壁には建国の父・ケマル大統領の肖像画、イラン側には故ホメイニ師、

ハメネイ最高指導者、ラフサンジャニ大統領の写真が掲げられてあった。一九九六年当時の話である。現在のアフマディネジャード政権では、彼の写真が掲げられているのであろうか。

イランへの入国審査は、厳格をきわめていた。カバンを開けて荷物検査は厳重に行う。私の前のフランス人旅行者は、六枚のCDを摘発され、ちょうど日本でいえば有害図書没収の「白いポスト」風のボックスに捨てられていた。当方は、CDのジャケットを日本に置いてきていたし、女性のグラビヤ写真のある雑誌の類いは持つてきていなかったで、難を逃れた。

「キリスト教文明の害毒から、イランを守るためには、万里の長城を築きたい」（ホメイニ師）と建国された国なのだ。それぐらいの注意は、当然なのである。

所持金のドルは隣の銀行に行つて、数えてもらい、証明の判を押してもらふ必要があった。女性はチャドルの着用が義務づけられ、身体の線が明らかになる服装はもちろん厳禁。いかなる人も、酒は飲めない。外国人観光客とて、例外ではないのである。



イランの女性たち

パーレヴィ国王の「白く革命」 ホメイニ師の「カセット革命」

一九七九年の「ホメイニ革命」前のパーレヴィ国王は、開かれた考えの持ち主だった。学校を作つて、文盲率の低下に努めたり、ダム建設と緑化の推進、道路や橋の整備など、着実に近代化をはかってきた。「白い革命」とも呼ばれ、内外で高く評価されていた。フランスに亡命中のホメイニ師は、それらすべてが気に入らない。



イランの田舎町

パーレヴィ政権打倒の「説教」をカセットに吹き込んで、イラン国内に持ち込ませた。

全国五万のイ

スラム教モス

クでは、その

「説教」が流

され、権力側

の腐敗もあつ

て、急速に

政権打倒の気

運が高まつて

いった。「ホ

メイニ革命」とつながったのである。「カセット革命」とか、ソニー製が多かったので、「ソニー革命」とも呼ばれている。

首都テヘランで泊まったラレ・インターナショナルホテルのロビーには、「DOWN・WHITE・USA」のスローガンが書かれてあつた。いまだ「ヤンキー・ゴー・ホーム」の攘夷気分なのであろう。そういえば、男子用トイレでは、ウェスタンスタイルの立ち小便用便器が見当たらず、ネクタイをする大人も見かけなかった。アメリカが意識されるものは、みな駄目ということなのであろうか。

銃突きつけられて「職務質問」 あわや警察署に連行!?

テヘランの銀座みたいな繁華街で、一人で歩道橋をながめていたら、コツコツと腰にあたるものを感じた。振り返ってみると、ライフルをかまえた制服二人組が立っており、早口で、何やらまくしたてられた。ペルシャ語らしいが、さっぱり分からぬ。もともと英語で喋られたって、同じことなのだが。ちょうど通りがかりのビジネススマン風の中年紳士が、助け舟を出してくれた。ゆっくりとした英語で「どこから来たのか」「目

的は何か」「どこに泊まっているのか」などを訊かれたので、やっと答えることができた。「パスポートを見せる」と言われたけれど、あいにく持参していない。ホテルカードを見せて、無事解放となった。「革命防衛隊か」とビジネススマン氏に尋ねたが、「ポリスだ」との答えだった。いずれにせよ、突如の銃を突きつけられての「職務質問」は、気持のよいものではない。ビジネススマン氏がいなかったら、警察署に連行されていたかもしれない。

実家から仕送り受ける日本人妻 日本語で声かけるイラン人

それはさておき、イランで印象深いことといえば、テヘランに向かう田舎町でのことである。昼食をとるため、町のレストランに入った。青年がやってきて「私の奥さんは、日本人ですよ」と、横の女性を紹介してくれた。

彼女は神奈川県出身。伊勢原市か秦野市と言ったと思うが、確かなことは覚えていない。しかし、「日本人に会うのは、久しぶりなんですよ」と、たいそう懐かしがってくれたことと、身重であつたこと、「実家から仕送りがありません」と、はっきり言われたことだけは、鮮明に覚えている。ご亭主は、トヨタの中古を乗り回していた。

うがったことを言えば、実家では可愛い娘がイランにいる、もうすぐ孫が生まれる、なんとかせねばと仕送りをする、それを働き口のないイラン人亭主が使う、ということになるのかと、暗澹たる思いにとらわれた。

でも、まだ、ましなのかもしれない。一時、フィリピン・バンドが日本で流行っていたころ、ファンが彼の国まで追っかけて行き、パスポートを取り上げられ、夜の女にさせられてしまったという話を聞いたことがある。イランの旦那に愛されているのなら、彼に働き口がなくても、働いていなくても、幸せではないかと思っただ。

首都テヘランのバザールでは、よく日本語で声

をかけられた。

「日本の方ですね。私はね、栃木県の佐野市に五年間いました」

「ああ、ラーメンのうまいところね」
——なんていう「会話」を、何度もかわした。

不法滞在外国人といえ、イラン人を指す時代もあつた。でも、それはそれで、両国の親善に役立っているのである。

競争率10倍の国会議員選挙 チャドルを着ない女性も

イラン滞在中、ちょうど国会議員選挙があつた。現地の人々の説明によると、定員（現在は二百九十

ポスター掲示板

人）の十倍以上が立候補している、との話だつた。複数の候補者がいるということは、共産主義国家よりは民主的といえる。スピーカーを備えた選挙事務所や、候補者名人入りの選挙チラシも見かけた。青年代表、婦人代表、労組代表などと、所属を明らかにしての戦いのようであつた。何はともあれ、次の大統領選挙で



選挙キャンペーンポスター

は穏健派が奪権するのか、または保守強硬派が勝つのか。「核疑惑」同様に、注目される場所である。

イラン北西部のアゼルバイジャン人が多く住む地域を、旅していたときのことだ。旧ソ連アゼルバイジャン共和国からやってきた女性たちは、スカーフを被っていないければ、チャドルも着ていなかった。イランの方は、ご存知の通りの完全装備である。果たして、これらのことが、これから変わっていくのか。興味が尽きない。

■てらいとある 昭和22年生まれ、46年、中大法卒。雑誌編集者、新聞記者を経て現在、尚美学園大学非常勤講師、ロングステイ財団広報委員、日本旅行作家協会会員。『サンダル履き週末旅行』（竹内書店新社）をはじめとする旅行記のほか、近刊としてエッセイ『裏方物語』（時評社）がある。

